

<協同のひろば>

イタリアの福祉協同組合を訪問して

北村 敬子 (大阪府/介護福祉士)

地域共同体を訪ねて

～コムニタ・カーポダルコ～

ローマ郊外にあるコムニタ・カーポダルコという地域共同体を訪ねた。

ここは、1966年に13人の障害者と青年神父ドン・フランコによってつくられた障害をもつ人々とそうでない人々が共同で労働と生活をする共同体の一つで、6つの労働者協同組合(電子工学、陶器、トラクター⇨農業、アペマイア=布の再生、紙細工、社会調査センター)、乳児院、職業訓練センター、デイケアセンターなどをもつ。このコムニタの理念は、①共同生活、②社会に統合された協同組合の組織、③地域参加でありアシストされる人とする人との分離を克服し、すべての人についてその個人の変革の可能性が日常生活の中で保障されていくことをめざす。そして、このことが協同組合という形で実践されているのである。

紙細工協同組合は、日本の障害者作業所と似たふんい気で、9～10人が小箱をつくっていた。他の協同組合においてもいえることだが、ここは決して「保護された作業所、ではなく、市場の原理にも勝ちぬき、自分たちの賃金は自分たちで生み出すことをめざしている。このことが、現実の社会と対峙するという教育にもなっているということであった。しかし、今の不況の中で、陶器コープは、競争が激しくコストダウンされまた、電子工学のコープも一時帰休という状況にあった。

アペマイア(布の再生)協同組合の前には大きなカートに古着や布がいっぱい積まれ、作業場では選別やカット作業が行なわれており、入口で車イスのミケーレさん(責任者)が笑顔で迎えてくださった。これらの古着は、ローマの教会をとおして地域で集められたもので、まだ着れそうなものは洗濯をして売るといふ。その販売コーナーでやはり車イスのミケーレさんの妻に出会い住まいに案内された。車イスが自由に動ける広く明るい

ダイニングには、忙しそうに立ち働く彼らの息子夫婦たちがいて、同居しているマリッサさん(初期の頃から住む婦人で車イス)も顔をみせた。共同体では8～15人くらいのグループで生活をすする。ミケーレ夫妻は70年に結婚したが、こういったファミリー形式の小人数での共同生活もある。ミケーレさんがかつて障害者としてアシストされる立場であったが働く中でこの協同組合をまかされ、他の人たちをアシストする立場になった。彼は「自らの存在が財産になった」と言う。

コムニタは地域にむけてもひらかれている。職業訓練センター、リハビリ、社会的統合センター(障害者や青年、女性のためのサービス)などが活動している。こういったコムニタは、イタリアの14都市にあり、障害者や社会的困難をかかえた人々を育成するコムニタは100ほど、麻薬患者に関するものはもっと多い。

コムニタへの財政援助は、県、州、U S L (公的医療機関)、E Cの補助、地域からの寄付などに依っている。しかし、イタリアでも社会保障分野での財政抑制政策がすすめられており、現在、保障されている公的財政援助を守るための活動も強められていかねばならないということであった。

このあと訪問した電子工学協同組合は、イタリアの大手電話会社S I Pの下請けを中心にしてしたが、現在は一時帰休になっていた。ここには24名が働いており、うち障害者は8名。一時帰休制度では、I N P S (社会保障全国機関)から、80パーセントの賃金が保障されている。ここでも、障害者にとってリハビリや医療面からのケアだけでなく、大切なのは社会的側面からのケアであり、住居、労働、社会参加の重要性が強調されていた。

高齢者福祉はこれから(?)

～老人ホーム～

1960年代に建てられたという、ローマで最大の老人ホームを訪ねた。180名が入所しており、寝

たきりの人が60名という。

収容施設というふんい気や、入所に1～2年待つこともあるということ、送迎バスでのデイサービス、地域にひらかれたホームにしていこうというところみなど、日本の状況とよく似ていた。こういう面からも、高齢者福祉はこれからということころだろうか。もっとも、年金の水準の高さは日本とは比ぶべくもないが。ヨーロッパの中でも比較的家族や地域とのきずなが強いといわれるイタリアにおいても、高齢者介護についてはもう限界にきている。この高齢者福祉をすすめる力として協同組合に大きな期待がよせられている。この老人ホームでも、自立していない老人のアシストは〃OSALL〃という協同組合が行なっている。そして、管理部門はローマ市の職員が、食事、清掃は企業というふうに、公協民が互いに刺激を与えあいながら好ましい効果をうみだしており、労働者間の強い協力関係をつくっているということであった。私たちにも学ぶところが多くありそうだ。

援助・教育するのが目的

～レスポнда老人サービスコープ～

地域の高齢者へのサービスコープ、レスポнда老人サービスを訪ねた。

10年前に生まれたこのコープは、ローマ市内20区にある老人サービスコープの一つで、会員250名、ローマ市の認可をうけ、州との契約で在宅サービス事業を行なっている。

現在、ケアをしている老人は160人。働いている人は在宅介護に直接でかけるヘルパーが19名、外に2名の理学療法士、2名の心理療法士、1名の看護婦、社会福祉士がおり、アシストの内容は老人が自分の家で暮らせるように援助、教育するのが目的である。(日本の福祉サービスというイメージではなく、社会サービスということであった)だから、対象となるのは医療的、経済的に自立している人、他人との関係がもてる人、他人に依って生きることを拒否する人である。

興味深かったのは、ローマ市で老人のガンや皮膚の老化について研究している人たちのゼミで、痴呆の老人にどう関わっていくかなどが議論され

たがそこで、男女の老い方の違いについて、男性に比べ女性の方がよい老化をするという仮説がだされたそうだ。男性は自分の身体について、戦争や仕事にのめりこむ目的のための身体は知っているが、全体として知らないというのである。

人間らしい暮らしという点では、イタリアでは日本よりもはるかに認識が高い。年金制度の充実、労働時間の短さなどさまざまな社会制度面からだけでなく、生活を大切にすること、文化的要求の高さ、ゆとりの追求、また、自分の意見をはっきり主張する、議論好きなどの国民性によるもの、社会や政治への関心の高さなど、日本人に比べれば男性とてはるかに人間らしい暮らしをしているとは思うけれど、そういったことが老化の仕方と関係があるというのは興味深い仮説ではないか。

イタリアの協同体、協同組合を訪問して思ったのは、〃協同〃の思想の広さと深さである。

高齢者の自主的、自発的な要求をまとめ、実践していく組織である「アウゼル」を訪問した時にも〃公的サービスの不足を補う〃ということ、〃公的サービスでは不可能な面(例えば、プライバシーの問題や気づきにくいことなど)への援助〃、〃公的機関とちがって自主管理できること〃などを明確に述べられ、公的サービスだけに頼るのではなく、自主的などりくみを〃協同〃という形で実践し、事業にしていくという現状をみすえたたくましさのようなものを感じた。そして、その実践を通じて市や州、県などの公的援助を実現していく。もちろん日本とちがって、協同組合を育成していくというイタリアの国の政策が根本にあるからではあるが。公的援助もあくまでもその組織が提案するプロジェクトに対してであり、日本のように既成の組織や制度そのものに対してはなされない。たいへん合理的であり納得できる。先の選挙で右派が政権をとり、ネオナチの台頭なども報道されているイタリアにおいて、経済的、政治的にも力をもつといわれる協同組合がどのように発展をしていくのか注目していきたい。とくに高齢者福祉の面で交流もできればと思っている。